

変貌する村、街の風景 ——クダー州——

黒田景子(鹿児島大学)

マレー世界の研究に携わってほぼ 30 年になる。最初は KL に住んでいたこともあり、さまざまな機会にいろんな地方を訪ね、フィールド調査中の方々のおじゃまもしたりした。だが、この数年は自分のフィールドがクダー州ということもあって、日本からはトランジットで KL あるいはバンコクを経由してペナンに降り立つことが多くなった。ペナンの滞在も数日で、その後はレンタカーでクダー州を走り回っている。

このようなことになったのは、筆者が研究領域としている南タイのムスリム地域で紛争が治まらず入りにくくなったのと、クダーというタイとマレーの境域世界でのタイ人の動向を調べる研究に焦点を絞ったからである。おかげで、クダー州の全タイ寺院 42 カ所を訪問調査し、クダー中の道路に詳しくなった。今の時点で私ほどこんなにクダーの道路に詳しい日本人はあるまい、えへん。

調査でタイ寺院を探して走り回っているうち、はじめてこの地域を訪れた 90 年代の風景が消え、人々も代わり、マレーシアがますます「都市化」へ突っ走っていることを実感する。20 年もたつのだから出会った人々が亡くなり、世代交替していくのは辛いことだが受け入れるとして、都市化の影響によってこうも風景が変わってしまうのかと驚くことも多い。

クダー州では 2000 年に 2010 年完成予定の大型プロジェクトを組んで州内の交通網を整備し、タイとの新しい国境ゲートを開くことにした。この計画には UUM(マレーシア北部大学)が係わっていて、2010 年までには完成できないよ、とささやく声もきいたが、土木整備はちやくちやくと進んでいる。

ところがこの道路整備で困惑したのが私である。道路地図が当てにならない。グーグルマップもフォローしていない道がどんどん出来る。クダーの古い村落をつなぐ道路網に並行し、あるいは村の中を突っ切って片側 2 車線の高速道路並みの道が産業道路として建設される。去年通れた道が見つからず、目的の村の場所も大回りしないとたどり着けない。道路網の組み替えによってアクセスが容易になった村とより不利になった村が明確になってきた。

さらに、かつて『暮らしがわかる(アジア読本) マレーシア』で書いたことのあるタイとの古い国境で、閉鎖されていたドリアンブルンへの道が整備され新しい国境ゲートとして開通した。そこに至る風景はあまりの変貌に迷ったのかと心配になるほどである。新国境は現在コタ・プトラと名付けられ、2010 年 4 月に開通し、立派なゲートと道ができているのだが、タイ側ゲートはまだ建設中で開通はしたもののタイからはマレーシアで働く労働者を乗せたピックアップトラックが通っている程度である。しかし、大型免税店予定地などクダー州政府がこの道に期待していることがみてとれた。

変貌したのは国境だけではない。ペナン州と接していればペナン州への労働力供給拠点となっている南部のスガイパタニの周囲も激変した。いまやショッピングモールを中心とし TESCO やスターバックス、その他専門店に囲まれた商業地域、その周りに赤い屋根と白い壁の郊外住宅が幾重にも取り囲み林立する郊外地域と化している。朝夕の通勤時間にはぴかぴかの乗用車が大渋滞となり、赤信号に

は待機 140 秒と表示される。

このような変化はマレーシア全土で進行中なのだろう。それがマレーシアをどこへ引っ張っていくのか、私は興味といささかの不安をもって眺めている。いずれにしろ、世代交替と風景の交替の中でわたしたち観察者の目や立場も変わっていくのだろう。研究者もまた、時間軸の中に生きている存在である。それを忘れることはできない。自分の経験してきた時間の流れを意識しつつ今後もマレーシアを眺めつづけていきたいと思っている。